エス オー エス

おかあさんSOS

竹崎有斐・作/斎藤博之・え

創作子どもの本　3

おかあさんSOS

竹崎有斐

金の星社

おかあさん SOS

創作子どもの本3

1974年2月／発行©

著者／竹崎有斐

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4－3
電話／東京03—861—1506(代表)
振替／東京64678

印刷・製本／株式会社　ケイエムエス

乱丁落丁本はおとりかえ致しますので，お求めの書店または本社へお申し出願います。

913　竹崎有斐
おかあさん SOS
金の星社　1974
140P　22cm（創作子どもの本3）

基本カード記載例

8393—041031—1406

はじめに……竹崎有斐

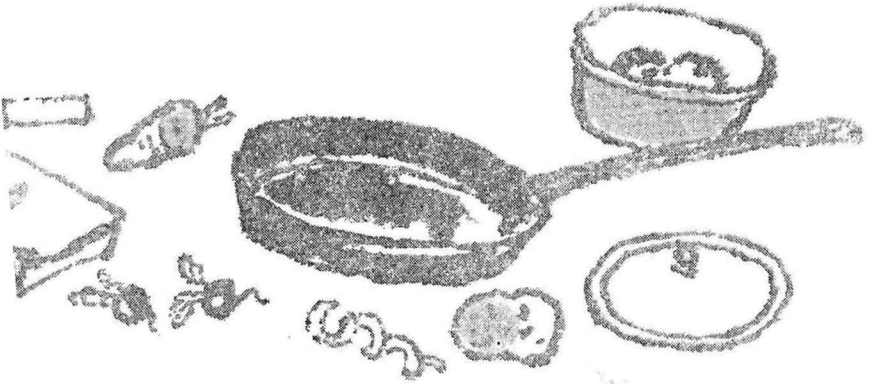
杉太（さんた）のおとうさんは、大山平（おおやまたいら）という名前です。でも、みんなから「へーさん」とよばれています。ちょっとたよりないおとうさんですが、いっしょうけんめい働いています。

ところがきのう、へーさんは、おかあさんをおこらせてしまって、うちの中には、へーさんと杉太のふたりっきりになってしまいました。

さて――。

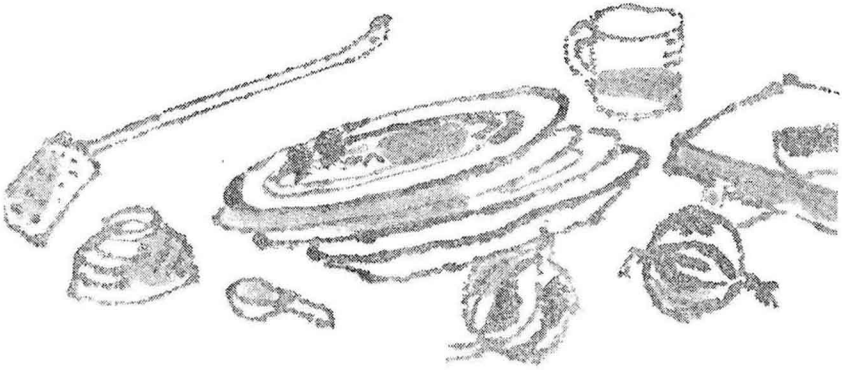
もくじ

こまるのは、ぼくだ……6
子どもにも ボーナスだせ 17
どろぼうも がっかり ……34
それでこそ男どうしだ……56



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

学校の先生の先生……69
家政婦杉太は、三百円……87
やったぜ！　へーさん……101
おかあさんSOS……119
あとがき……136



作者・画家紹介

竹崎有斐(たけざき ゆうひ)

1923年，熊本県に生まれる。早稲田大学卒業。現在，坪田譲治氏の主宰するびわの実学校同人。おもな著書に「火をふけゴロ八」「パイがこんがり焼けるとき」「とびこめのぶちゃん」「まっちばこのおかしなみせ」などがある。

現住所－東京都保谷市住吉町1－19－7

斎藤博之(さいとうひろゆき)

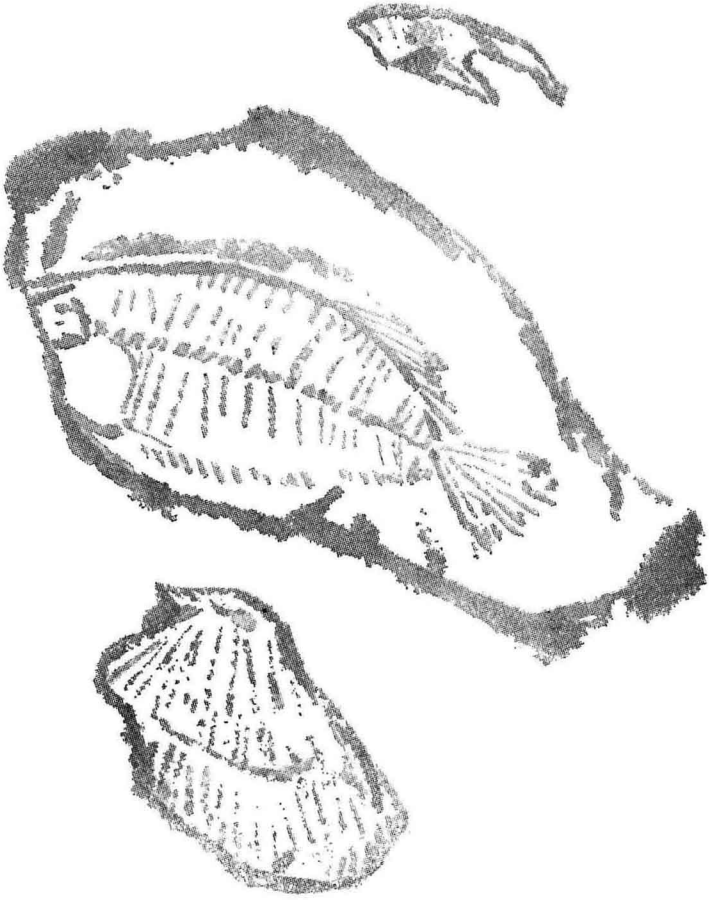
1919年，満州奉天に生まれる。
帝国美術学校洋画科卒業。野心的な油彩制作を続けている。1971年，第2回講談社出版文化賞・絵本部門で受賞。おもな作品に「しらぬい」「がわっぱ」「むささび星」「ぐみの木の丘」などがある。

現住所－国分寺市南町2－11－15

創作子どもの本　3

おかあさんSOS

竹崎有斐



こまるのは、ぼくだ

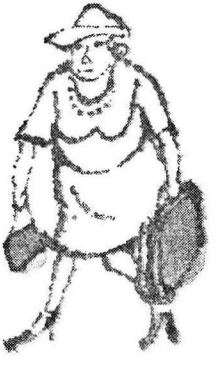
「おとうさん。ほんとに、おかあさんがいなくても、だいじょうぶなの。」

杉太(さんた)はしんぱいになって、おとうさんにききました。

「だいじょうぶさ。おかあさんがいなくたって、へっちゃらさ。」

おとうさんは、たたみの上にねころんで、たばこをぷかぷかのんでいます。

「だって、ごはんもたいて、おかずもつくらなくちゃいけないんだ



よ。」

「ごはんなんて、お米をあらって、電気がまにいれて、スイッチいれればたけちゃうじゃないか。おかずだって、ほんとうは、とうさんがつくったほうが、うまいんだぞ。朝のみそしるだって、かつおの一番だしで、ほんとにうまいのをつくってやるから。」

かつおの一番だしというのは、にえたったお湯の中に、たくさんのけずりぶしを、さっとくぐらせてとった、だしだそうです。一番だしをとったあと、もう一ど二番だしをとり、かすになったけずりぶしは、おしょうゆでいためて、ごはんのふりかけにすると、とってもおいしいのだと、おとうさんは、とくいになって、はなしていました。

「だいたい、かあさんなんて、だしなんかとったことないじゃない

か。なんでもかんでも、化学調味料でごまかしちゃうんだ。」
「でも、おかあさんのみそしるも、とってもおいしいよ。ぼくはごまかされても、おかあさんのでいいんだけどなあ。」
「ちえっ、なさけないなあ。人間てのは、さいしょにならされたあじが、一番うまいと思うようになるんだ。でも、あしたから、とうさんが作ったみそしるのんでみろよ。なるほど、これが本もののあじかって、よくわかるから。」
「へえっ、あじに本ものと、にせものがあるなんてしらなかった。おいしければいいとばかりおもってたんだけどなあ。でも、どんなに本もののあじでも、おかずがみそしるばかりじゃいやだよ。」
「しんぱいするな。ハンバーグだって、ロールキャベツだって、八宝菜だって、なんだってつくってやらあ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だいたい料理っていうものは、手間ひまをかけて、おいしいものをたべさせようという心でつくるものだと、おとうさんは、さかんにいきまいていました。

きのう、おとうさんは、おかあさんと、ちょっとけんかをしました。じつは、きのうだけでなく、この一週間ばかり、どうも雲ゆきがあやしかったのです。

おとうさんは、新聞や雑誌にのせる、いろんな広告をつくる仕事をしています。いぜんは、テレビや洗たく機をつくる電機メーカーの宣伝部につとめていたのですが、いまは、広告代理店からたのまれる広告づくりを、うちでやっています。

一つの広告を作るのに、いつも五枚も十枚もかいてもっていくの

ですが、ときどき、どれもこれも、スポンサー(広告主)の気にいらないことがあります。でも、おとうさんは、

「スポンサーのやつ、どんな広告がいいか、わかっちゃいないんだ。」

といって、あんがい平気な顔をしていますが、こまるのはおかあさんです。はいるつもりだったお金が、はんぶんもはいらないのですから、ぶうぶうもんくをいいはじめます。

ここのところ、三かいばかり、こんなことがつづいていました。

「こまるわよ。自分が気にくわなくても、スポンサーが気にいる広告をつくったらどうなの。絵や小説だったら、あとになって、よさが発見されるってこともあるけど、広告は、つかってもらえなかったら、それっきりじゃないの。りっぱな芸術広告を作るより、まず、ちゃんと使ってもらえて、こっちにお金がはいってくる広告を、作

ってほしいわね。」

一どいいだすと、おかあさんも、じつによくしゃべります。おとうさんが、この耳のいたいおしゃべりを、ストップさせるには、にげだすか、それとも「うるさいぞ、だまれっ」と、どなるよりほかにありません。いい合いをすると、おかあさんに負けてしまうからです。きのうもおとうさんは、この「うるさいぞ。だまれっ！」をやってしまいました。

そこで、やめておけばよかったのです。ところが、おかあさんもかなわないくらい、おとうさんがしゃべりはじめました。

「かあさんってのはいいよ。すわって、もんくをいっとればいいのだから。すこし、ひまがありすぎるんじゃないのかい。ひまがあるならあるでいいけど、もんくばかりいわずに、たまには、うまい料(りょう)

理でもつくったらどうだい。

だいたい、肉といえばブタを焼くだけ。魚といえば冷凍マグロのさしみを買ってくるだけ。これじゃ食欲もなくなって、頭もはたらかなくなるというものだ。」

これはすこし、おとうさんのいいすぎです。たしかに、ここのところ、おとうさんがいうようなのが、つづいていましたが、おかあさんだって、けっこうおいしいものをつくることがあるのです。きっとおかあさんは、だまっちゃいないぞと思ったら、そのとおりになってきました。

「あら、おいしいざいりょうを、どんどん買うお金があったら、どんなお料理だってつくってあげますよ。それに、ひまだひまだっていうけど、わたしだってけっこう、一日じゅういそがしいのよ。な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com